

昭和63年1月11日～2月4日
大学図書館2階展示ホール

落窪物語

この『落窪物語』は、平安期に成立した継子いじめ譚である。書名は、文中で、継母が「寝殿の放出の又一間なる落窪なる所の二間なるになむ住ませ」て「落窪の君」と呼んだことに由来する。作者には源順をあてる説があるが、論拠に乏しく、未詳である。男子であること。上層階級ではないが、学識がある人物というのが一致した説である。成立時期は明確ではないが、「枕草子」の「成信の中将は」の段に「交野の少将もどきたる落窪の少将などはをかし」とあることから「枕草子」成立期の長徳・長保（1000年前後）以前といわれる。この『落窪物語』の伝本はほとんどが近世に入ってから書写で、近世をさかのぼるものでも良質の本文ではなく、多くの本文の欠落及び改変があるといわれる。この物語は近世に入って賀茂真淵がとりあげて、その門流の手によって校合・研究がさかんに行なわれた。しかし文意の通じない部分を他の諸本の文意の通じやすい本文をとって校訂の事たれりとする風潮が近世の校訂学者にあるという指摘（岩波日本古典文学大系『落窪物語』解説）もあり、本文・解釈面において多くの問題を残す物語である。

- 1 おちくほ (常磐松文庫)
写本四冊 半紙判 十二行書き 奥書なし [寛永中頃写] 印記
「安田文庫」(安田善次郎)・「月明荘」(反町茂雄) 箱入
日本古典文学全集(小学館刊)の底本になった一本。善本の少ない
諸本の中で重要な伝本である。

- 2 おちくほ (山岸文庫)
写本四冊(春・夏・秋・冬) 半紙判 十行書き 朱書入れ 各冊扉
に書名・巻名・丁数明記(春七十六丁・夏八十一丁・秋五十丁・冬四
十九丁) 印記 「山岸文庫」(山岸徳平)
- 3 おちくほ (山岸文庫)
写本四冊 美濃判 十一行書き 奥書なし 朱点書入れ及び頭注あり
印記 「静慮江澤氏蔵」「江澤氏蔵」(江澤静慮)・「山岸文庫」
「岸廻舎蔵」(山岸徳平)
- 4 おちくほ物語 (山岸文庫)
写本四冊 美濃判 十二行書き 昭和中山岸徳平令写本 原本 宮内
省図書寮部本 二冊目巻末に「昭和竜輶庚午黄鐘上院[五年十一月上
旬]以朱書入了焉」 四冊巻末に「落窪物語四巻以図書寮本書写早
(略)以縣居大人[賀茂真淵]校訂本之轉写本書写焉 岸廻舎」
印記 「山岸文庫」「岸廻舎蔵」(山岸徳平)
- 5 おちくほ物語 (黒川文庫)
刊本三冊(四巻) 美濃判 十行書き 寛政十一年(1799)大坂
葛城長兵衛等刊 文化九年(1812)清水浜臣本と校合 岡田真澄
(美毛比磨) 四本校合(小笠原近江侯蔵繪巻物八巻・村田春海蔵本
四巻・中村文字蔵本三巻・大海蔵本) 印記 「黒川真頼蔵書」「黒
川真道蔵書」
この寛政十一年刊本は、上田秋成校訂本といわれる。
- 6 おちくほ物語 (黒川文庫)
刊本四冊(四巻) 美濃判 十行書き 寛政十一年(1799)大坂
葛城長兵衛等刊 明治二十四・三十二年 中村秋香校合 付箋多し

印記 「中村蔵書」「中村書記」「不盡廼屋文庫之記」「たか春の…」
(中村秋香)・「黒川真道蔵書」

上田秋成校訂刊本を底本として、中村秋香が校合を加えたもの。後の中村秋香の「落窪物語大成」著述の基礎作業を窺わせる。

- 7 おちくほ物語 (山岸文庫)
刊本二冊 (巻一上・下のみ) 美濃判 十行書き 刊記なし [寛政十一年(1799)刊本と同板] 朱点・墨書入れあり 山岸徳平貼り紙あり 印記 「菅園蔵記」・「山岸文庫」(山岸徳平)

- 8 落くほ物語系図並傳 (黒川文庫)
写本一冊 美濃判 奥書なし 黒川真道朱書入れ 見返しに「本書作者何人かしらねど落久保物語よまん人ハ座右にそなへてその人々の傳記をしるたつきとすべき書にこそ 真道」
上田秋成校訂本を以て作られた系図。人物名のしたに略伝を記す。

- 9 おちくほ物語註釈 (常磐松文庫)
源道別著
刊本二冊 (巻一上・下) 美濃判 安政三年(1856) 大坂河内屋和助等刊 寛政四年(1792) 橋千蔭序 頭注・傍注あり
印記 「日下蔵書」ほか
橋千蔭の友である源道別が賀茂真淵の意見に自己の考えを補って著わした。巻一のみを頭注・傍書したもの。

落窪物語 (御伽草子)

- 10 おちくほ草紙 異本 (山岸文庫)
写本一冊 美濃判 八行書き 昭和十年山岸徳平令写本 原本 芝山家本 巻末に「おちくほ草紙 一冊 芝山家本也 従栗田口信豊君借

覽而令書写者也 昭和十年十一月中院 岸廼舎識之」

印記 「山岸文庫」(山岸徳平)

「落窪物語」を翻案した別個の物語で、室町期に成立した。継子譚の外形を踏襲して、六角堂観音の信仰をすすめる観音靈驗譚。

該本は、石川透著「落窪の草子」の成立(藝文研究第四十七号)に詳述されている。

- 11 おちくほ 奈良絵本 (山岸文庫)
写本十二冊 大本 十行書き 奥書なし [室町末期写] 各冊極彩色挿絵五点(二冊目のみ六点) 箱入

- 12 おちくほ 奈良絵本 (常磐松文庫)
写本三冊 大本 十行書き 奥書なし [寛文・延宝頃写] 極彩色挿絵(上六点・中六点・下七点) 紺地金泥草木文表紙 外題「おちくほ 春の(上・中・下)」
「いわゆる「落窪の草子」(小落窪)とは別本だが、いずれも平安時代時代成立の「落窪物語」の翻案ものとしては同類。本書は該本と次本[13番]のほかアイルランドのチャスター・ビーティ図書館に夏之上・中巻が現存するなど、巻の異なる若干の残欠本が報告されているのみで、他に伝本の存在を聞かない稀覯本。」(昭和61年度実践女子大学市民公開講座貴重書展展示目録)

- 13 おちくほ 奈良絵本 (常磐松文庫)
写本一冊 大本 十行書き 奥書なし [寛文・延宝頃写] 極彩色挿絵十四枚 紺地金泥絵表紙 外題「おちくほ 秋上」

続おちくほ

近世中期頃の成立といわれる、平安初期の宮廷を舞台にした擬古物語。作者は、「扶桑残葉集」所収本には五井純禎作となっているが、明確では

なく、未詳である。物語中で自ら手を下さずに復讐を遂げる場面が「落窪物語」と似ているところから「続」と命名されたといわれる。

14 続おちくほ (山岸文庫)

写本一冊 美濃判 十行書き 奥書なし 卷末系図一丁あり
 識語「此續落窪物語者浪華儒生中井履軒所著也見于上田秋成膽大小心録」次本〔15番〕卷末に関連識語あり
 印記 「山岸文庫」(山岸徳平)

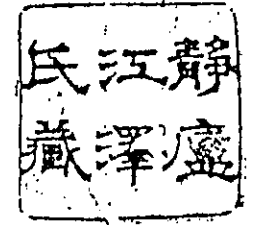
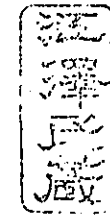
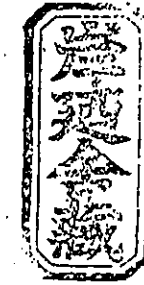
15 續落くほものかたり (山岸文庫)

写本一冊 美濃判 十行書き 昭和三年山岸徳平令写本 原本 伊勢神宮文庫本 [昭和三年]八月十六日一校了(墨書入れ) 卷末系図一丁あり 山岸徳平識語「胆大小心録 卷上日/段々世がかはって五井先生と云がよい儒者であった。今の竹山履軒はこのしたての禿じや契沖をしんじて國学もやられた。續落窪物語といふものをかゝれて味噌付られし事よ。云云/中井兄弟の師なり五井先生は。即ち純禎、蘭洲又は洲菴と號す傳在先哲叢談然續落久保之著不多傳于坊間故知蘭洲之著者稀也乃聊附記焉 昭和四年夏八月 岸廼舎」
 印記 「山岸文庫」(山岸徳平)

16 續落くほものかたり (山岸文庫)

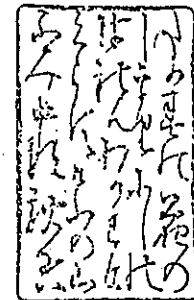
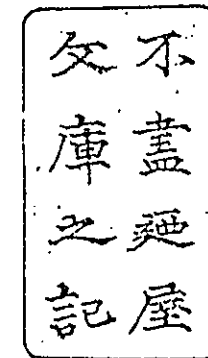
写本一冊 美濃判 十行書き 昭和五年山岸徳平令写本 原本 愛知刈谷文庫本(村上忠順自筆本) 卷末系図一丁あり 印記 「山岸文庫」(山岸徳平)

蔵書印



山 岸 徳 平

江 澤 静 庵



さる春花のし呼りよし此はれんわら
 見はえらぬふの山ふみ 中郵秋香

中 村 秋 香